『フォアニータ』にみる 19世紀のキューバにおける奴隷制とカースト

Cuban Slavery and Caste in the 19th Century in *Juanita*

倉　橋　洋　子*
Yoko KURAHASHI

キーワード：キューバの奴隷制、カースト、葛藤、プランテーション、解放
Key words：Cuban slavery, caste, conflict, plantation, emancipation

要約

『フォアニータ』（1887）はメアリー・ピーボディ・マンの1830年代のキューバにおけるプランテーションでの奴隷制やカーストの体験を基に執筆された。本稿では『フォアニータ』に描かれた19世紀のキューバにおける奴隷制やカーストの現状、およびその改革を登場人物の奴隷制やカーストとの関わり方の分析を通して考察する。奴隷制の現状は、著者を彷彿させる主人公ヘレンの批判により明らかになる。彼女にとってキューバは奴隷商人が社会的地位を保持する善悪の区別のない場所であり、奴隷への罰は残酷で耐えがたい。奴隷制の改革に関して、ヘレンの友人で家父長制とジェンダーに抑圧された奴隷所有者の妻は、改革には無力である。また、彼女と反抗的な古参の家内奴隷との逆転した関係は、いずれ訪れる奴隷制廃止の兆候のようである。キューバのカーストに呪縛された悲劇の象徴は、法的には自由であるが祖母が奴隷であったためにサーバントとして扱われているフォアニータが担っている。一方、長期の隷属状態は自立を妨げることが、改革されたプランテーションから自由になった奴隷が去らない時に明らかになる。結局、キューバのみならずどこにおいても、奴隷制とカーストは奴隷や関係者に苦悩や葛藤をもたらし、それが廃止され、意識が変革するまで真の解放はない。

Abstract

Juanita (1887) is based on Mary Peabody Mann's experience of slavery in Cuba in 1830s. In this paper, Cuban slavery, caste and their reform in *Juanita* are studied through the analysis of the characters. To Helen, who is similar to Mary Peabody Mann in criticizing slavery, slavery is cruel, and Cuba has no distinction between good and evil because of slave traders' honored position in society. As far as the reforms of

＊東海学園大学経営学部経営学科

slavery, Helen's friend, the oppressed wife of a slaveholder by patriarchy and gender, feels conflict but has no power. Moreover the reversed relation between the wife and her old disobedient slave is a sign of the future abolition. The symbol of a Cuban caste tragedy is Juanita whose grandmother was a slave. Juanita is free in the legal sense but is treated as a servant because of her grandmother's state. On the other hand, when freed slaves in the reformed plantation choose not to leave, it is made clear that the long term slave state hinders independence. Eventually slavery and caste brings agony and conflict to both slaves and all others concerned. True emancipation will not come until slavery ends and the ways of thinking changed not only in Cuba but everywhere.

はじめに

『フォアニータ』(*Juanita: A Romance of Real Life in Cuba Fifty Years Ago,* 1887)は、アメリカのマサチューセッツ出身のメアリー・ピーボディ・マン(Mary Peabody Mann, 1806-1887)が1830年代に体験したキューバの奴隷制やカーストを題材に執筆した小説である。メアリーは政治家のホレス・マン(Horace Mann)と結婚し、後にアンティオークカレッジの学長となった夫を支え、著作にも専念したピーボディ家の三人姉妹の次女である。メアリーがキューバに行った目的は、マーシャル・メーガン(Marshall Megan)によれば、ピーボディ家の長女のエリザベス(Elizabeth)の発案により、当時ひどい偏頭痛を患っていた三女のソファイア(Sophia)の治療と交換に、プランテーションで家庭教師として働くことにあった(268 - 269)。[1] 1833年12月末、メアリーとソファイアはハバナ郊外にあるフランス人のモレル医師(Dr. Morrell)のプランテーションに到着し、そこで1年半近く滞在している間に奴隷制の実態を目の当たりにした。

キューバの黒人奴隷制度は、1511年のスペインによる征服以後、キューバの先住民の封建的生産様式に代わり導入され、ヨーロッパ、西アフリカ、および西インド諸島からそれぞれ武器、奴隷、砂糖等を輸出する三角貿易により成立していた。神代修によれば1807年にイギリスは奴隷貿易を禁止したが、奴隷制度に頼った世界一の砂糖生産地のキューバを植民地に持つスペインは、奴隷貿易を禁止しなかった(59－60)。他方、1812年から、キューバでは断続的な奴隷の蜂起が起きていた。1817年にイギリスとスペインは奴隷貿易を禁止する協定を締結したが、スペイン政府はキューバへの奴隷貿易を黙認し続けた。キューバではようやく1886年に奴隷制が廃止された。

メアリーとソファイアがキューバに到着した1833年前後は、奴隷の暴動を恐れ、ヨーロッパやアメリカに帰国したプランテーションの所有者もいた時期である。しかし、その一方で北アメリカの裕福な人々は、療養のためにキューバに滞在していた。奴隷制度が非合法であると1783年に宣言したマサチューセッツ州出身のメアリーは、奴隷制を自ら体験し、奴隷制に対する憤慨をキュー

バ滞在中から書き始め、1850年中に『フォアニータ』の草稿をほぼ完成した（Megan　527）。しかし、『フォアニータ』の出版は、モデルとなったモレル一家の最後の一人が亡くなるまで待たれ、エリザベスの監修により1887年に出版された。メアリーは出版を見ることなく、同年２月に亡くなった。

2000年に『フォアニータ』がヴァージニア大学からパトリシア・M・アード（Patricia M. Ard）の序文付きで出版されたことは、この作品が再評価されたことを物語っている。『フォアニータ』に関する先行研究は希少であるが、アードは序文でメアリーを19世紀アメリカの政治、教育、文化において活躍した人物と評価した上で、『フォアニータ』の文学的特徴として、ホーソーンへのロマンスへの影響、ストウ夫人（Mrs. Stowe）の『アンクルトムの小屋』（*Uncle Tom's Cabin*）との比較、登場人物の幽閉状態等を論じている。また、ロベルタ・ウェルドン（Roberta Weldon）は、『フォアニータ』の影響としてホーソーンの作品中の女性の隷属状態を指摘している（141-142）。

『フォアニータ』では奴隷所有者と奴隷は、支配者と被支配者の単純な二項対立ではなく、複雑な関係にある。奴隷を他者として見なす典型的な支配者側の人物も登場するものの、人物の描き方はステレオタイプ的ではなく、それぞれの立場においてキューバの奴隷制やカーストに呪縛され、葛藤する個人が描かれている。本稿では『フォアニータ』における19世紀のキューバの奴隷制やカーストの現状、およびその改革を登場人物の奴隷制やカーストとの関わりの分析を通して考察する。

Ⅰ　19世紀のキューバにおける奴隷制の現状

『フォアニータ』の時代背景は、著者のメアリーがキューバに滞在した年代と同じ1830年代に設定されている。『フォアニータ』において、奴隷制反対の立場からキューバの奴隷制を批判するのは、メアリーを彷彿させるニューイングランド出身で、キューバに到着したばかりの白人アメリカ人のヘレン・ウエントワース（Helen Wentworth）である。主人公ヘレンは、スペイン人のプランテーションの所有者の妻であるイザベラ（Isabella）の友人で、メアリー同様、イザベラの子供たちの家庭教師として働くためにキューバに来た。ヘレンが最初に奴隷制に対して「嫌悪」と「憤り」（10）を感じるのは、キューバに到着直後に目にした奴隷の競売である。競売にかけられているアフリカの部族の若いプリンスは、アフリカで婚礼の儀式の最中に、同国人と白人に拉致され、年長者と幼い子供を除く同席していた者すべてとともに、奴隷としてキューバに連れて来られた。彼の幸福な結婚や立場は一瞬のうちに変化した。アフリカの黒人を奴隷にするために拉致する奴隷商人側の考え方は、スペイン人の奴隷商人であるドン・ミゲル（Don Miguel）の娘のツリタ（Tulit）により語られる。ツリタは奴隷商人の父親の説を受け売りし、アフリカの部族は敵を奴隷にするので、「このキリスト教徒の土地に連れて来られた」（10）のは、

彼らへの慈悲であると詭弁を弄する。典型的な支配者側のツリタには奴隷制度に対して罪悪感が存在しないために葛藤がみられない。

さらに、ヘレンが驚愕するのは、競売で奴隷の家族が別々に売られ、一家離散の憂き目に遭うことである。それに対してツリタは、次のヘレンとツリタの対話にみられるように奴隷は気にしないと主張する。

> "Are families separated to be sold?" she almost gasped out.
>
> "Oh, yes, to be sure; that is, sometimes," said Tulita, for the first time thinking anything about it. "It does seem cruel, but papa says they don't care."
>
> "Not care!"
>
> "Oh, they are not like us, you know."
>
> "I do not know any such thing!—they must have human affections if they are human beings!"
>
> "I should hardly think so," said Tulita, "for papa says they are in the habit of killing their own children."
>
> "Probably to save them from slavery," said Miss Wentworth. "I like them all the better for it."
>
> "But they do it in Africa—it is an African vice." (10-11)

ツリタは、家族が離散しても「彼らは私たちとは違う」(11) と主張し、奴隷の人間性を認めようとしない。ツリタが主張を曲げないのは、これまで考えようともしなかったことをヘレンに指摘され、自己の価値観や信条が崩壊することへの恐怖心もあると考えられる。

一方、競売における奴隷の一家離散を嘆くのは、ドン・ミゲルの幼い息子のカリート (Carlito) である。カリートはアフリカで拉致された若い夫婦のために、父親に挙式を許すよう懇願する。結局、その夫婦は別々のプランテーションに売られていくが、カリートは姉のツリタとは異なり、黒人奴隷の売買に素直に心を痛める感情を持っている。それは、幼いがゆえに奴隷商人である父親の価値観にまだ染まっていないからである。他方、ツリタは、結婚式で黒人たちが手を叩き、叫び声を挙げてウエディングダンスをするのを見て、アフリカの奴隷も結婚式では「彼女自身と同じ感情を持っている」と初めて認識する (13)。奴隷制に憤慨するヘレンは、ツリタに奴隷制の理不尽さを認識させようと努力しつつも、奴隷制そのものが存在しているキューバに対して絶望感を抱かざるをえない。奴隷貿易を黙認するキューバは、ヘレンにとって奴隷商人という犯罪者が「社会的地位」を確保している「善」(good) と「悪」(evil) の区別のない場所である (14)。

さらに、ヘレンが奴隷制において憤慨することは、プランテーションの監督が反抗的な奴隷に対して「懲罰」のために行う鞭打ちである（34）。この場面に憤慨するのは、ヘレンのみではない。イザベラの20歳の息子のルドヴィーコ（Ludovico）も、罰を与える監督をピストルで撃とうとするが、父親に制止され罰は続行する。家父長制にあってプランテーションの所有者の家長が罰を是認している状況で、ルドヴィーコの行為は根本的な解決にはならない。ヘレンは奴隷への鞭打ちの罰に関してプランテーションの女主人のイザベラに抗議する。ヘレンの追及にイザベラは、「私たち女性はこのことについてはどうしようもない」（We women cannot help this thing.）（34）と家父長制のもとでのジェンダーを持ち出して改善を回避しようとする。また、イザベラはアメリカで教育を受けたが、罰が「奴隷の意志をくじくために必要である」（35）と罰を必要悪と捉えている。それでもなお、ヘレンは次のように、女主人としての責任をイザベラに追及する。

> “Tell me why you did not interfere if you were displeased with this. Has a master no power over his overseer? Of whom are you afraid?”
>
> “It is for the sake of the poor people that we must be cautious, for the overseer must not be exasperated.”（35）

結局、イザベラは、主人も抑えることの難しい現在の監督の激昂を恐れていることが判明する。プランテーションの所有者は、奴隷の管理を監督に一任しているために、奴隷の罰は監督次第である。さらに、イザベラは奴隷の反乱をも恐れていることが判明する。イザベラは女主人として支配者側の立場を享受するような状況にはない。結局、イザベラは夫に逆らうこともできず（74）、理不尽な要求をしないよい女主人になり、見聞きする邪悪に耐えているが、「他の場所では本当に貧しくなる」（81）ためにプランテーションを去ることもできないがゆえに、葛藤に陥っている。

女主人のイザベラは家内奴隷のカミラ（Camilla）をも管理できないことをヘレンは知る。カミラは頑固で、「つむじまがり」（42）で、食料の窃盗も珍しくない。さらに、カミラは家父長制のジェンダー構造を利用して、主人のロドリゲス（Rodriguez）には従うが、女主人のイザベラに反抗的な態度を取る。奴隷は同等の人以外、言論の自由や不平を言う権利はないために、カミラは言葉ではなく、態度で巧妙にイザベラに反抗する。次に示すように、プランテーションにおいて古参の奴隷のカミラは、新参者の女主人のイザベラを奴隷のように扱っている、とイザベラに感じさせる存在である。

> “Camilla was spoiled before I came to La Consolacion. A former overseer ruined

her, and they became such tyrants together that the whole rule was taken from the master's hands, till on one occasion they ventured a little too far, and he was dismissed, and Camilla sent into the field till her proud spirit was humbled a little. Since my regime she has taken me for her slave; but she is so useful I cannot do without her, and when my children are ill she is like one inspired. She is never so well content as when the power is all in her own hands." (67)

イザベラは奴隷のカミラなしではプランテーションの女主人の役割を果たせないために、彼女に主導権を握られている。支配関係の逆転した関係にイザベラは葛藤しているが、現状を変更できない状況は、いずれ訪れる奴隷制廃止の兆候のようである。

アードは次のように、イザベラの役割は奴隷制を守ることであり、それに対する罰は「死」であると述べているが、アードはイザベラの葛藤には注目していない。

One of Isabella's functions for her husband is to police both visitors and family, censuring them for protesting slavery; reluctantly, she does so. As Mann presents the story, Isabella's punishment for this role is death. (xiii)

著者の意図はイザベラに死の罰を与えることではなく、プランテーションの所有者の妻も奴隷制を無条件で享受しているわけではなく、葛藤していることを示すことにある。イザベラは「徐々に奴隷解放が始まるかもしれない」(157) と覚悟しているが、自ら奴隷制の改革や奴隷解放を実行できない。そのようなイザベラの死は、外部からの圧力による奴隷解放がなされるまで、現状を維持しようとする限り続く葛藤に、彼女が耐えられなかった結果である。

一方、ヘレンが著者のメアリーの行ったように、奴隷の罰に関して女主人のイザベラに抗議したのは、「上層の奴隷 (upper slave) より少し上だった」(175) 家庭教師の地位を考えると、勇気ある行動である。しかし、ヘレンがプランテーションの主人のロドリゲスに抗議することを避けたのは、ヘレンも家父長制に呪縛されていることを示している。さらに、ヘレンは奴隷商人の娘のツリタには、奴隷制の残酷さを認識させようと試みたが、父親のドン・ミゲルには直接そのことを訴えない。この点においてヘレンも家父長制に呪縛されている様子が伺える。マーシャルによれば、著者のメアリーも女主人のモレル夫人には奴隷の罰について訴えたが、逆にたしなめられ、メアリーは解雇されないように奴隷制への改革の努力は、次世代を担う子供の教育に向けた (277)。経済と関連するキューバの奴隷制の改革は、家父長制に呪縛された女主人には不可能であり、ましてや一家庭教師の働きかけでは困難であることが示されている。

Ⅱ　キューバにおけるカーストの呪縛

キューバにはカーストが厳然と存在し、人々がそれに呪縛されている様子が、『フォアニータ』に描かれている。ヴェレーナ・マルティネス・アリエル（Verena Martinez-Alier）はルイス・デュモント（Louis Dumont）のインドとキューバの比較研究を紹介しているが、それによれば次のように、奴隷と自由人、有色人種と白人、アフリカ人とヨーロッパ人、新教徒と旧教徒等、19 世紀のキューバには社会を 2 つの対立するグループに分ける原理があった。

slaves	v. free
coloureds	v. whites
Africans	v. Europeans
New Christians	v. Old Christians
manual workers	v. non-manual workers
poor	v. rich
plebeians	v. nobles (*hidalgos*)
illegitimates	v. legitimates
of impure blood	v. of pure blood
infamous	v. with honor
mixed	v. unmixed

（131）

マルティネス・アリエルによれば、キューバでは実際、社会的地位は一つの基準による「単純なグラデーション」（132）ではなく、これらの組み合わせが考えられた。また、出所、生まれは、社会における個人の地位を決定するのに大変重要と見なされたが、個人の業績も社会的上昇の合法的な手段として是認されていた。自由な有色人種も白人の血が混ざっていることによる、いわゆるグラシャス・アル・サカル（*Gracias al Sacar*）によってこれの質のいくつかを獲得することができたが、奴隷は別だった（131-133）。

『フォアニータ』でも、カーストに呪縛されているが故に階級の上昇を試みる者が描かれている。キューバでは「砂糖貴族」（165）が多数いるが、購入した称号は世襲のそれより低くみなされていた。奴隷商人のドン・ミゲルが、奴隷商人という職業を隠し、貴族の孤児と結婚して社会的地位を上げたのもカーストに呪縛されているからである。今また、彼が娘のツリタを資産はないが伯爵の称号のある男性と結婚させるのもそのためである。

『フォアニータ』において、キューバのカーストに呪縛された悲劇の象徴は、フォアニータ（Juanita）が担っている。ムーア人が奴隷になることは珍しかったが、彼女の祖母はイザベラの義理の父に買われたムーア人で、フォアニータの祖父と父親は白人である。イギリスとスペイ

ンとの奴隷貿易禁止協定以降、キューバに連れて来られた人々は自由人であるが、コミュニティー全体がそのことに無知であった（77）。フォアニータは自分自身が自由であると認識しているが、彼女は祖母が奴隷であったために、プランテーションでイザベラの息子のルドヴィーコの遊び友達兼サーバントとして育ち、周囲の人々は彼女を奴隷と認識し、彼女もそれに従っている。フォアニータが奴隷でなく自由人であると即座に認識してイザベラに指摘するのはヘレンであるが、イザベラはそれを知りつつもフォアニータをサーバントとして使っている。

フォアニータは、美しく、気高く、肌の色は濃い褐色で、絵も刺繍も特別に巧みであり、他の黒人奴隷とは区別して描かれている。そのようなフォアニータはルドヴィーコにとって「彼の一部」（96）であり、彼女もルドヴィーコに好意を抱いている。しかし、フォアニータの気持ちを心配するイザベラは、彼女は「私たちの中における自分の地位をわかっているにちがいない」（106）とフォアニータのカーストへの認識を期待する。イザベラのこの言葉には、カーストへの呪縛が端的に示されている。この点が「人間はカーストに囚われなく、教育と性格によりどの地位にもつける」（164）と思うニューイングランド出身のヘレンと異なる点でもある。

カーストに呪縛された人々の中で、フォアニータがカーストを思い知らされるのは、いずれルドヴィーコの婚約者となる父方のいとこのムラトーのカロリナ（Carolina）が出現する時である。カロリナは敏感にもフォアニータの「誇り高い外見」（96）を指摘するが、フォアニータが法的には自由人であることを知らないルドヴィーコは、「彼女は母のメイドにすぎない」（96）と応答する。この言葉にフォアニータが傷つくのは、ルドヴィーコもカーストに囚われており、彼女は恋愛の対象外だからである。

フォアニータ自身もいかにキューバのカーストに呪縛されているかは、保護者兼友人のイザベラの没後も、奴隷の子供たちの世話に没頭し、ルドヴィーコとカロリナの結婚後もプランテーションに留まっていることに示されている。また、フォアニータは、出産時にカロリナが亡くなった後も彼女の子供の世話をする。それは、アードが指摘しているようにルドヴィーコへの愛もあるが（xx）、カーストの存在する社会において保護者のいないムーア人と白人の混血の若い娘が生きていくことは困難であるからだ。著者のメアリーがルドヴィーコとフォアニータをこの時点で結びつけないのは、キューバのカーストの厳しさやそれに呪縛された人々の偏見を伝えるためであると考えられる。

さらに、フォアニータの精神的隷属状態、カーストの呪縛は、物理的に自由になってからも続く。自由人としてフォアニータは、ヘレンとともにイザベラやルドヴィーコの子供を連れてマサチューセッツへ行き、ヘレンの開講した学校で著者の妹のソファイアのように絵画を教える。フォアニータが自由の身になっても憂鬱なのは、「ルドヴィーコの訪問を熱心に待ち焦がれている」（212）からだ。それにもかかわらず、フォアニータは数年後のルドヴィーコの突然の訪問と求婚を率直に喜べない。それは次の引用で示すように、彼女は長期間、虐げられてきたために、幸せ

に対する対処法がわからないからだ。

> Juanita's habitual life-long reserve did not yield, and it was easier for her to keep the secret of her happiness than would have been possible to one who had not always veiled her soul from human eyes. Indeed, she did not know what to do with happiness. The hopeless suffering of her life had almost destroyed the capacity for enjoyment. (212)

ヘレンはプロポーズに関して、ルドヴィーコに「カーストの偏見」(213) は乗り越えられると勇気づける。しかし、カーストに呪縛され、カースト社会を理解しているフォアニータは、彼の父親の賛同が得られないと予測し、「もし、結婚したら、彼の人生の暗雲になるでしょう」(211) と求婚を断る決意をする。結局、ルドヴィーコの父親の危篤のために、フォアニータは一時的なサーバントの身分に戻り、キューバに行くが、逃亡奴隷の長になっていた兄や他の奴隷や自由人たちとともに、奴隷解放運動の混乱の中で監禁され、監禁場所が放火されてあっけなく焼死する。フォアニータは、奴隷制の理不尽さとカーストに呪縛された悲劇の象徴である。

アードは、次の引用で示すように「『フォアニータ』においてロマンスは社会的進歩を遅らせている」(xxi) と指摘している。その理由はアードによれば、メアリーは19世紀の多くの女性作家と同様にリアリズムと掛かり合ったが、社会改革と関連した前者とは異なり、彼女はキューバの奴隷制のおぞましさを記録しているものの、ロマンスへの傾倒のために、19世紀のニューイングランドの作家と同様に現実を曖昧にしている点にある。[2] しかし、ロマンスは現実逃避でもなく、作家が形式や内容に囚われなく自由に書いたものであり、『フォアニータ』は奴隷の視点から描かれていないが、フォアニータの死に象徴される悲劇的なロマンスとして、読者に現実社会の厳しさを容易に想像させ、読者への影響力があると考えられる。

> In *Juanita*, romance serves to retard social progress. Critic Judith Fetterley observes that for many nineteenth-century women writers, a "commitment to realism is closely connected to the commitment to social change." Mann's commitment to realism—her detailed examination of the horrors of slavery from capture in Africa, through the deadly Middle Passage, to years of torture on a foreign island－do align with her commitment to record the horrors of Cuban slavery for history. But her attraction to romance suggests a need to obscure the realities of race and the effects of slavery, a need shared by other New England writers of her century. (xxi-xxii)

Ⅲ プランテーションの改革

キューバで奴隷制度が廃止に至ったのは1886年になってからだ。『フォアニータ』の終焉は、ルドヴィーコによるプランテーションの改革に始まり、奴隷解放に至る様子が描かれている。ルドヴィーコは父親の死後、フォアニータの死を無駄にせず、悲しみを乗り越えるためにもプランテーションの改革に没頭する。次の引用で示すように、ルドヴィーコの改革は、幼いころからの奴隷制に対する嫌悪に根差している。また、彼がプランテーションの所有を継承することは母親の願いではなかった。

> Generous childhood always takes the part of the oppressed, where any chance for the development of sentiment is afforded, and an early repugnance to slavery had manifested itself in Ludovico, in which his mother inwardly rejoiced, while she was cautious not to impair his respect for his father. It was Marquis' intention that he should go to France, … and his mother hoped he would never return to the life of a planter, even if she was actually separated from him. (53)

このようなルドヴィーコが個人でできる改革には限界があり、また奴隷の数に応じて税金が課せられたために、砂糖とコーヒーのプランテーションの経営は想像以上に容易ではなかった。しかし、ルドヴィーコの奴隷に対する方針は、奴隷は「自由に行動する機会が与えられれば、多くの能力を示す」(214) に基づいている。具体的には、ルドヴィーコは砂糖シーズンの労働緩和のために機械を導入し、熟練した労働は報われるようにし、さらに、彼らのための銀行もつくり、報酬は貯金できるようにした。奴隷の「陽気さや敏活さが無気力や怠惰にとって代わった」(220)。ルドヴィーコは奴隷制の生産性の悪さや、労働に対する動機づけの必要性を理解していると考えられる。さらに、ルドヴィーコは奴隷の住居を改善し、結婚制度を促進した。

最も重大なことは、ルドヴィーコが奴隷に自由を提供したが、彼らはプランテーションの「親の世話」(221) から離れようとせず、暴動の日が来た時にでさえも離れることを願わなかったことだ。ストウ夫人の『アンクルトムの小屋』でも解放された奴隷が主人のところに留まる。これは、主人の優しさだけでなく、長期間の隷属状態は、自立を妨げることを示している。この点に関して、ホーソーンも隷属状態にあった人間がその状態から抜け出られないことを『アメリカンノートブックス』(*The American Notebooks*) において描いている。

> Some man of powerful character to command a person, morally subjected to him, to perform some act. The commanding person to suddenly die; and, for all the rest of his life, the subjected one continues to perform that act. (VIII, 226)

『フォアニータ』でヘレンが指摘しているように、「奴隷を自由にした国では、自由になる準備として多くのことを教育した」(141)。隷属状態から解放され、自立して生きていくには準備期間、教育、さらに援助が必要であることを示している。

結局、ルドヴィーコは、将来の処分のために、信頼の厚い監督ドン・アンドレス（Don Andres）にプランテーションを任せて家族でスイスに行くことで、キューバのプランテーションと奴隷制から事実上解放される。

おわりに

『フォアニータ』では理不尽で残酷な奴隷制とカーストに呪縛された人々が描かれていた。キューバ体験をもとにこのような『フォアニータ』を執筆したメアリーに対して、夫のホレス・マンは「彼女の輪のなかにいるときはいつでも、なすべき善や取り除くべき悪があり」、彼女は「真の威厳と人生の真の目的」という変わらぬ意識をもって、それを行うために存在していたと述べている、とマーシャルは指摘している（ix-xx)。ニューイングランド出身のメアリーは、キューバの奴隷制を体験し、非人道的な制度に憤りを感じ、次世代を担う子供の教育が大切であるとの認識から、キューバ滞在中から子供に教育を施し、帰国後も幼児教育に携わった。また、メアリーは姉のエリザベスや夫のホレス・マンとアメリカの奴隷制反対運動に関わっていった。

一方、メアリーとキューバに行ったソファイアと、その夫のホーソーンは、心情的には奴隷制に賛成していなかったが、エリザベス、メアリー、ホレス・マンのように積極的に奴隷制廃止運動に参加することは好まなかったと考えられる。[3] ホーソーンは、1838年８月15日付の『アメリカンノートブックス』において、酔った黒人をみて「おおむね、自分はむしろ原理よりも感情において奴隷制廃止論者だと気づいた」と記している（VIII: 112)。キューバの奴隷制を体験して憤慨したメアリーのみならず、奴隷制の問題はアメリカの問題でもあり、人道的な見地から労働力搾取としての奴隷制の是非の議論に国中が否応なしに巻き込まれていった。

結局、メアリーを奴隷制廃止運動に駆り立てた奴隷制とカーストが廃止され、人々の意識も改革されるまで、真の解放は奴隷、プランテーションの所有者、さらに周囲の者全員にもたらされない。『フォアニータ』にみられた悲劇、奴隷制やカーストの呪縛や苦悩や葛藤は、キューバに限定されたものではなく、どこにでも当てはまる普遍的なものである。

註

本研究は、科学研究費補助金（基盤研究（C）23520339）による研究成果である。また、本稿は2012年５月25日、日本ナサニエル・ホーソーン協会ワークショップにて口頭発表した原稿に加筆修正したものである。

１．ピーボディ姉妹の長女のエリザベスは、アメリカで最初の幼稚園を設立した教育者で、三女のソファイアは19世紀の作家、ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）の妻となった女性である。

2．ホーソーンは『七破風の家』（*The House of the Seven Gables*）の序文で、ロマンスを次のように定義している。「作家がその作品をロマンスと呼ぶ揚合には、言うまでもなく、その作家は、その作品の形式と内容の両者に関して、ある種の自由を要求したいと思っている。それは、もし、小説を書いていると公言したら、ほしいままにする資格があるとは思えないような自由である。」（II: 1）

3．奴隷制に関して、ソファイアは、1834年3月8日付の *Cuba Journal* で奴隷の悲しみに同情して涙を流すプランターの妻のモレル夫人を「まれな人物」（45）であるとみなしている。一方、ダイアン・G・ショール（Diane G. Scholl）は *Nathaniel Hawthorne Review* において、ソファイアの奴隷制に対する考えは、キューバ滞在で変化し、ソファイアは奴隷制に対して批判的になっていったと論じている。ブルース・A・ロンダ（Bruce A. Ronda）によれば、エリザベスは、1850年代までに奴隷制廃止運動にエネルギーを注ぎ始めるようになった。また、ロンダは、ホーソーンが奴隷制廃止運動に参加しなかったのは、1852年9月に、奴隷制賛成のフランクリン・ピアースの大統領選のために「フランクリン・ピアース伝」（*The Life of Franklin Pierce*）を書き、ピアースのおかげでリバプールの領事の職が得られたことと関係があると指摘している（263-265）。

引用文献

Ard, Patricia M. Introduction. *Juanita: A Romance of Real Life in Cuba Fifty Years Ago*. By Mary Peabody Mann. Charlottesville: UP of Virginia, 2000. xi-xxxiii.

Hawthorne, Nathaniel. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. 16 vols. Ed. William Charvat et al. Columbus: Ohio State UP, 1971-1985.

Hawthorne, Sophia. *Cuba Journal, 1833−35*. Ed. Claire Badaraco. Michigan: UMI, 1997.

Mann, Mary Peabody. *Juanita: A Romance of Real Life in Cuba Fifty Years Ago*. UP of Virginia, 2000.

Marshall, Megan. *The Peabody Sisters: Three Women Who Ignited American Romanticism*. Boston: Houghton Mifflin Co., 2005.

Martinez-Alier, Verena. *Marriage, Class and Colour in Nineteenth-Century Cuba: A Study of Racial Attitude and Sexual Value in a Slave Society*. Ann Arbor: U of Michigan P., 2009.

Ronda, Bruce A. *Elizabeth Palmer Peabody: A Reformer of Her Own Terms*. Cambridge: Harvard UP, 1999.

Scholl, Diane G. "Sophia Hawthorne's Cuba Journal as Piece de Resistance." *Nathaniel Hawthorne Review*. 35, 1 (2009): 23-22.

Weldon, Roberta. *Hawthorne, Gender, and Death: Christianity and Its Discontents*. New York: Macmillan, 2008.

神代修『キューバ研究史―先住民社会から社会主義社会まで』文理閣, 2010.

参考文献

Bell, Millicent, ed. *Hawthorne and the Real: Bicentennial Essays*. Columbus: Ohio State UP., 2005.

Bush, Barbara. *Salve Women in Caribbean Society*, 1650-1838. London: James Curry, 1990.

Coale, Samuel Chase. *The Entanglements of Nathaniel Hawthorne: Haunted Minds and Ambiguous Approaches*. New York: Camden House, 2011.

Cogan, Kathleen P. *The Influence of Political Events and Ideologies on Nathaniel Hawthorne's Political Vision and Writings*. New York: The Edwin Mellen P., 2001.

Gura, Philip F. *American Transcendentalism: A History*. New York: Hill and Wang, 2008.

Hawthorne, Julian. *Nathaniel Hawthorne and His Wife: A Biography*. 2Vols. Boston: Houghton Mifflin, 1984.

Woodson, Thomas. Introduction. *The Letters*, 1813-1843. By Nathaniel Hawthorne. *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. Thomas Woodson et al. Vol. 15. Columbus: Ohio State UP, 1984.